

# 自分の学びを振り返るためのノートづくり ～キャラクターを使ったノート指導

滑川町立宮前小学校 小林 徹

## 1. こんなノートを目指したい

ノート指導について、こんなことを考えて取り組み組んでみた。

### ① こんな算数の授業をやりたいなあ

- 子どもたちの主体性・自主性を伸ばすことのできる授業
- 友達や先生といっしょにつくっているという実感のもてる授業
- 子どもたちのアイデンティティの形成を図ることのできる授業

そのためのノート指導を考えてみた。

### ② こんなノートができればなあ

- ただ単に授業を再現しているのではなく、自分の視点（留意点、修正点など）からの記述のあるノート
- 担任の用意した理解の文脈をそのまま覚えるのではなく、自分の中で1つ1つの授業をつなぎ合わせるとともに、自分と友達や先生との関わりをも織り込ませて、理解の文脈をつくり出していこうとするノート
- 自分の理解の過程をストーリー（物語）として表現し、その中に自らの思考に深く関わっている友達や先生を位置付け、振り返りやすくかき表しているノート

### ③ ノートに何をかけばいいのかな

4月当初、子どもたちと、「ノートに何をかけばいいのか」と話し合い、次のようにまとまった。

- 大切なことがすぐわかるノート
- 授業を振り返ることのできるノート
- 自分の間違いやすいところがよくわかるノート

## 2. ノートにキャラクターを登場させよう

ノートに、式や答え、筆算あるいは解決に必要な絵や図などとともに、自分でつくった自分だけのキャラクターを用いて、主に、次のようなことを意識してかいてみようとした。

- ア 自分の気持ちや思いをかく。
- イ 友達の考えや意見で、「うん、なるほど」と思ったところ、「おやっ」と思ったところをかく。（授業中に友達の考えや意見に出合ったとき、自分の心が動いたら、それをそのまま素直にかこうと投げかけた。）
- ウ 授業中に先生が言ったこと、特に何回か繰り返したことや大きな声で言ったこと、また、ゆっくりと言ったところなどは大切な内容のことが多いから、話し方が変わったことに気が付いたらかき取る。

アは、「自己」の感情や思考についての記述である。イとウは、「他者（友達や先生）」に対する記述である。

子どもたちは、算数の授業で感情を表に出すことは憚られるという意識をもつこともある。その構えを崩すためにも、アは、特にていねいに指導していった。主体的な学びをつくり出すうえで、感情は、その土台をなす一部であるから、算数学習に対するよりよい信念の形成を図るためには、子どもたちの感情をつかむことを入口としていくことが大切であると、私は考えているからである。

イとウは、授業中に他者（友達や先生）を意識するきっかけ、また、個と他者とのよりよい関係づくりを意識するきっかけになるものと考えて指導した。

### 3. いつノートにかくのか

授業中に、ノートをかかせるタイミングについては、次のように指導した。

- 基本的には、授業中の自力解決や話し合いの場面では、あえて記述のための時間をとらず、子どもたちに任せた。
- 授業時間の後半に、「まとめ」や「感想」をかく場を2～3分程度設けた。
- 担任も自分のキャラクターをもち、授業中の子どもたちの大切なつぶやきや発言、大きな変容、あるいは、担任の考えや気持ちなどを黒板上で語らせていくようにした。

### 4. 日々の授業での工夫は

「ノートづくり」を指導するうえで、次のような点にも留意して指導した。

- 「ノートづくり」を年度の初めから急ぐことはせず、自分にとって何をかいていくことが必要なのか、自分の学びづくりを意識させることから指導した。
- ノートに友達の考えをかく欄をつくった。
- その日の授業で最も重要と思う友達の発言をノートに記録させた。
- ノートを互いに見合うノート鑑賞会を、1単元に1回程度、5～10分間設けた。(子どもたちは、それぞれのよさやまねてみたい表現などについて話し合い、共有していった。)

### 5. 具体的な子どもたちのノート

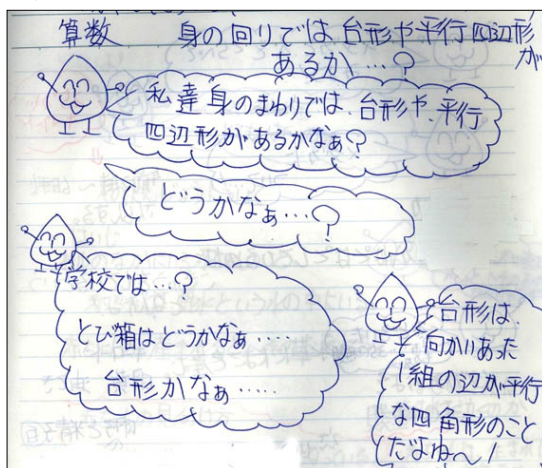
#### 事例1

右上の例は、身の回りにおける台形や平行四辺形について考えている場面である。

自分の分身キャラクターが、分身キャラクター同士で会話をしている場面がみられる。

このような会話形式は、指導目標の1つであり、評価の視点にもなる。しかし、会話の方向

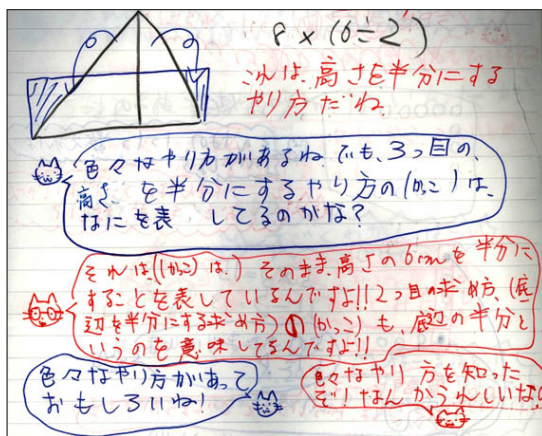
性は、まだ深まりのあるものにはなっていない。そこで、ノートの記述に対して、「どうして、その形が使われているのかな」などと質問し、考えさせていくようにした。



#### 事例2

三角形の面積を求めている場面である。

分身キャラクターと先生キャラクターの会話がみられる。



ここでの会話をみると、学習内容を理解し、他者との関わりを通して肯定的な情意形成が図られてきていることが伺える。

キャラクターの言葉の中に、「…なにを表しているのかな?」という「問い」がある。この「問い」は、算数の学習内容そのものへの「問い」という面をもつが、それだけでなく、自分とは違う考え方をした他者を意識しながら、そこに

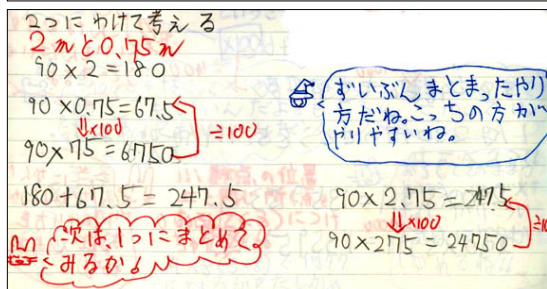
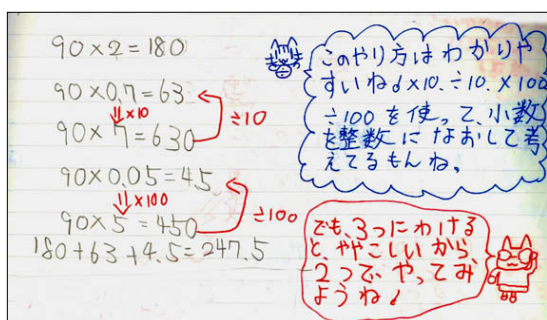
よさや価値を認めて自分に取り入れていき、新しい自分の学びをつくっていく上での「問い」と捉えていきたい。

このような問いをもつようになると、その後、他者に対する意識が肯定的に変容し、ノートの中に、自他の考えがより多くかけられるようになってきた。それとともに学習不安が減少し、授業中の表情もやわらかくなり、発表の機会も増えてきた。その結果として、学習意欲が高まり、成績も安定していった。

### 事例3

小数のかけ算の学習場面である。

ノートの中に、「自分自身」と「友達」と「先生」の3つの存在があり、その間の会話により、学びがつくられ始めている。



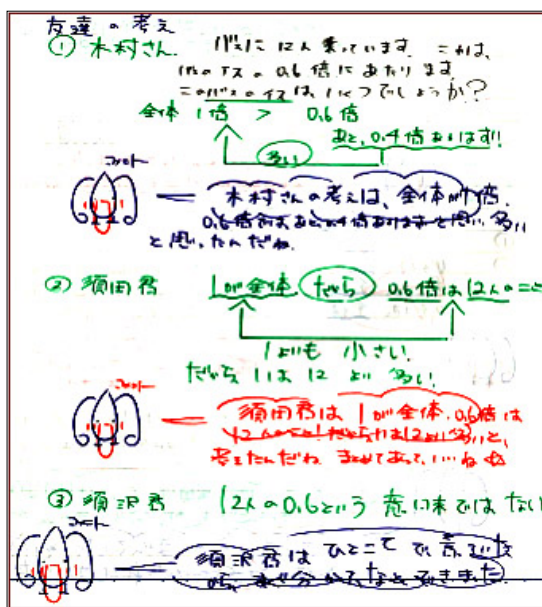
先生役のキャラクターは、初めから使われることはほとんどなかった。多くの場合は、まず自分の分身キャラクターが登場し、その後先生役のキャラクターが登場してきた。しかし、複数のキャラクターがほぼ同時に登場し、その中に先生役のキャラクターが登場していた子

どももいた。共通していることは、会話形式の記述がみられるようになってくると、それぞれの役割をもったキャラクターが登場してくるということである。

### 事例4

割合の学習の一場面である。

友達の考え方について、自分の意見をかいている。また、友達の考え方を自分の言葉で言い直したり、友達の考えのよさを価値づけたりしている。



### 事例5

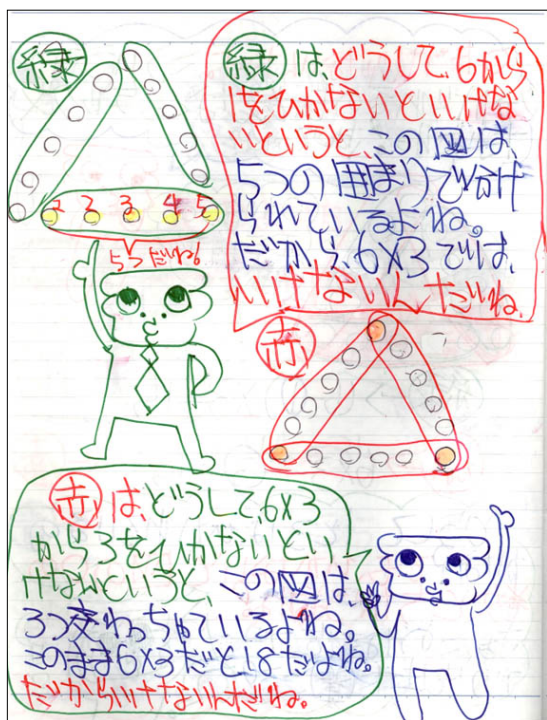
次ページのノートは、正三角形の形に並べられた石の個数を数える問題について考えている場面である。

1辺に6個ずつ並べた場合の誤答例(6×3)の理由について、先生キャラクターに「5つのかたまりで分けられている」と指摘させている。さらに、図にも「1 2 3 4 5」と書き込み、「5つだね!」と再び先生キャラクターに語らせて確認している。

また、(6×3-3)というもう1つの考え

方についても、根拠を示しながら、分身キャラクターに語らせている。

それぞれのキャラクターの役割を生かしながら、学びを振り返っているノートである。



## 6. キャラクターのコメントの深まり方

### 第1段階 単発・感情

表面的な心の動きの感情や気持ちをかく。

例：おもしろかった。がんばった。むずかしかった。つまらなかった。 など

### 第2段階 単発・知識

知識面を中心とした学習内容をかく。

例：～を勉強しました。～がわかりました。 など

### 第3段階 単発・他者

他者について価値付けをしている。

例：A君が〇〇をやっていた。Bさんの意見はとてもいいと思います。 など

### 第4段階 会話形式・一場面

複数の表情、複数のキャラクターが役割分担をしている。授業場面などを再現している。

## 第5段階 会話形式・物語調

学び全体をつなげて1つの物語のようにまとめている。そして、最終場面では、自分の学びを振り返っている。

## 7. まとめ

これまでのノート指導を通して、次のような子どもたちの変容をみることができた。

- 先生役のキャラクターや自分の分身キャラクターなど、複数のキャラクターを登場させることで、自力解決の様子（考え方や手順など）や、問題解決のストラテジーとそのよさ、計算手続きの留意点、そして情意面などが容易に表現できるようになってきた。
- 複数のキャラクターが、主に会話形式で登場してきた。これは、新しい学習スタイルであり、このことによって学習意欲が高まるとともに、子どもたちが主体性・自主性をもって「ノートづくり」を行うようになってきた。
- 子どもたちは、他者（友達や先生）を意識し始め、他者と自分の相違点を見いだそうとしたり、他者のよいところを自分に取り入れようとしてきた。つまり、他者の考えを自分の中に位置付け、学習が他者とともにつくられているという実感をもつことにつながっていった。
- ノートに自分の学習の足跡を残しておくことで、「振り返る場所」が明確になるとともに、学びの連続性が意識されるようになってきた。つまり、自ずと学びにストーリー（物語）が生まれてきていた。
- 子どもたちの学びは、「キャラクター」を用いて長期にわたって学習を進めていく中で、他者との関わりを志向し、他者との関わりの中に自分を位置付けていくものへと変容してきている。